

マレーシアとシンガポールにおける政治的腐敗（汚職）と経済発展の相関性について
-政治文化という媒介変数を通じて-

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-03-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中川, 豪 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/22261

「博士学位請求論文」審査報告書

審査委員 (主査) 政治経済学部 専任教授

氏名 大 六 野 耕 作

(副査) 政治経済学部 専任教授

氏名 高 橋 一 行

(副査) 政治経済学部 専任教授

氏名 伊 藤 剛

1 論文提出者 中川 豪

2 論文題名 マレーシアとシンガポールにおける政治的腐敗(汚職)と
経済発展の相関性について：政治文化という媒介変数を通じて

(英文題) Corruption and Economic Development in Malaysia and Singapore:
Political Culture as a Critical Intervening Factor

3 論文の構成

序論

1. 研究の位置づけ
2. マレーシアとシンガポールの政治文化と経済発展－インフォーマルな制度の役割－
3. 各章構成

第1章 マレーシアの政治文化と政権党・官僚制の形成過程

はじめに

1. 植民地時代の遺産と政権党の形成過程
 - (1) 政権党の誕生過程と政治的背景
 - (2) 植民地支配期の遺産と人種格差の発生要因
2. 人種間の隔たり－華人の台頭と人種衝突－
 - (1) 政治的領域で台頭する華人

- (2) 優遇政策の本格化とラザク政権の取り組み
 - 3. マレーシア型鉄の三角同盟の形成過程－政権党による財・官支配体制の確立－
 - (1) 現代官僚制の形成過程－政権党と官僚機構の長期的パートナーシップ形成の背景－
 - (2) マレーシア型 GLCs の特徴－政権党による財界の支配－
 - 4. マハティール政権期の罪過－ネポティズムの深刻化－
 - (1) 権威主義体制の確立とその副反応
 - (2) 残存するマハティール政権期の影響とネポティズムに呑まれた政治指導者達
- おわりに

第2章 シンガポールの政治文化と政権党・官僚制の形成過程

はじめに

- 1. リー・クアンユーの苦悩－アイデアリズム(理想主義)と権力抗争－
 - (1) PAP の危機-不毛なパートナーシップとアイデアリズムの瑕疵
 - (2) 新たな権力抗争－中央政府(UMNO)との確執,理想と現実の狭間で－
 - 2. プラグマティズムへの転換期－国運を委ねられた存在－
 - (1) プラグマティズムに基づく組織運営－政権党と官僚機構のパートナーシップ構築過程－
 - (2) 優秀な人材の選定と調達方法－教育制度と政府奨学金－
 - (3) シンガポールにおける公職者・官僚の給与水準－給与水準引き上げの正当性－
 - 3. シンガポール型メリトクラシーの特徴
 - (1) 教育制度とメリトクラシー－恩恵を受ける国民の存在－
 - (2) メリトクラシーの反作用－人種・経済格差の拡大－
 - 4. 政権党の権勢と国民の政治的選好
 - (1) 「クリーンにされた社会」の実態－なぜ誰も政権党を批判しないのか－
 - (2) 国民の政治的選考と政権党の政策方針－なぜ国民は政権党を支持するのか－
- おわりに

第3章 政治的腐敗・経済発展と政治文化－フォーマルな制度とインフォーマルな制度－

はじめに

- 1. 政治的腐敗に関する定義の歴史的変遷
 - (1) 政治的腐敗の定義と認識による評価の相違
 - (2) 近代化と政治的腐敗の関係－福祉国家と権限の集中－
 - (3) 政治的腐敗を制御する政府の役割
 - －なぜ政府は政治的腐敗を制御しなくてはならないのか－
- 2. 政治的腐敗の正の側面と負の側面－レントを独占・分配する政府の存在－
 - (1) レントシーキングとパトロンクライアント関係－経済発展を阻害する要因－
 - (2) なぜ、政府がレントを管理・分配すべきなのか－政治学の視点－
 - (3) 政府によるレントの管理・分配とその正の側面
- 3. 政治的腐敗の構造－鉄の三角同盟の有用性と課題－
 - (1) 政治的腐敗の型と定義－異なる性質－

(2) インフォーマルな制度とその有用性－「パトロン・クライアント・ネットワーク」と経済発展－

4. 政治的腐敗と経済発展の相関性－政治文化を媒介して－

(1) 公職者・官僚の資質と倫理観－経済発展を促進・阻害する存在－

(2) 民主主義と経済発展の相関性－民主化が先か、経済発展が先か－

(3) 民主化と政治文化－経済発展を阻害する独立変数－

おわりに

結論 政治的腐敗と経済発展のダイナミクス-3つのフェーズと対応策

はじめに

1. 政治的腐敗と経済発展のダイナミクス－動的な相関性－

2. 3つのフェーズ－いつ、政治的腐敗と経済発展は負の相関になるのか－

おわりに

参考文献

4 論文の概要

本論文は、政治的腐敗（汚職）と経済発展の間に、一般に想定されるような直接的な負の相関があるのか否かを主たるテーマとしている。新古典派経済学あるいは開発経済学の視点からは、政治的腐敗（汚職）は経済発展を阻害する最大の要因として考えられてきたと言ってよい。たとえば、1997年から1998年に発生したアジア通貨危機以降、Susan Rose-Ackerman等の政治腐敗の研究者や開発経済学者は、アジア通貨危機の根本的には、権威主義体制下にある政府によるレントの独占と権威主義体制の下で生成された「パトロン・クライアント・ネットワーク」（patron-client network）の存在があるとしてきた。また、開発経済学や新古典派経済学の視点からは、政治腐敗の存在は「経済的資源の最適な配分」を妨げることで、経済発展を阻害すると主張されてきた。世界銀行(World Bank)、国連開発計画 (UNDP)、OECD等の国際機関も、こうした観点から政治的腐敗を根絶するための施策（市民のエンパワーメント、政治・行政過程の透明性の確保、政府サービスの民営化や規制緩和、地方分権化等）を推進してきた。

しかし、こうした図式が当てはまる国々が数多く存在する一方で、民主的な先進工業諸国であれば当然、政治腐敗と見られる現象が存在する権威主義的な政治体制の下でも、目覚ましい経済発展を遂げる国家も少なからず存在するという事実も否定できない。中川氏は、この点に注目して「政治腐敗と経済発展の間には、これまでいわれてきたような直線的（straightforward）な関係はない」という挑戦的な仮説をたて、これを証明するため、権威主義的な政治体制の下で政治腐敗が社会に根深く存在するマレーシアと、同じく権威主義的な政治体制の下で対外的には極めてクリーンな対応を行いながら、国内の政治権力が腐敗に満ちているシンガポールを対象に、明確な政治腐敗が存在するこの2つの国がなぜ目覚ましい経済発展を遂げることできたのかを検証し、そのことによって政治腐敗と経済発展の間にある媒介変数を明らかにしようとしている。

まず第一章では、マレーシアの独立後（当初は、シンガポールも含むマレー連邦として）の政治史と政治文化に焦点を当てている。イギリスによる植民地時代に多くの華人系・インド系の入

植者がマレー半島に定住し、その経済的才覚によって経済的に優位な地位を確立していった。他方、イギリスの植民化以前にマレー半島に定住していたブミプトラ（マレー人とオラン・アスリと呼ばれる非イスラム系先住民を含む）は経済的に恵まれない立場にあり、華人系・インド系住民との間の経済的格差は、許容できないレベルに達していた。そうした中、独立後のマラヤ連邦初代首相のラーマン（Tunku Abdul Rahman Putra Al-Haj ibni Almarhum Sultan Abdul Hamid Shah）は、華人系・インド系マレーシア人の反対を恐れ、マレー人優遇政策の実施に躊躇した。このため、経済的に恵まれない立場にあったマレー人を中心とするブミプトラは、華人系・インド系マレーシア人への怒りを爆発させ、華人系・インド系マレーシア人と衝突する（「5月13事件」）。この人種衝突は、わずか数日で死者196人、負傷者439人の犠牲者を出す大惨事となり、マレーシアを構成する各人種に大きな衝撃を与えた。これを契機に、マレーシア政府はマレー人優遇政策を本格的に実施に移し、現在でもマレーシアの基本政策である「ブミプトラ政策」（マレー人を中心とするマレーシアの先住民を政治・経済的に優遇する政策）につながっていった。

こうした状況の中で、ラーマン政権・ラザク政権は、マレー人の結束を図るために、マレー人の政治・経済的指導者の縁故者を中心に官僚を調達しブミプトラ政策を実施する体制を作り上げてゆく。この後を襲ったマハティール（Tun Dr Mahathir bin Mohamad）首相は、自らのカリスマ性とこのネポティズム（nepotism）体制を最大限に動員することでマレー人の結束を固め、その結束力をマレーシアの経済発展に向かわせることに成功した。こうした観点からすれば、ネポティズムはマレーシアの経済発展を阻害するどころか、まさにその経済成長を支える原動力であったとも言える。しかし、マハティールによる権威主義的体制が長期化し、マレーシア経済がグローバル経済の中に深く組み込まれるようになると、マレーシアの経済成長を支えていたネポティズムもその弊害を表面化させることになる。

第2章では、イギリスから独立したマレーシアの自治州として出発したシンガポールにあって苦悩する若きリー・クワンユー（Lee Kuan Yew）の姿を描いている。彼の苦悩は、華人をマレーシア政府の支配から自律させ、いかに急速な経済発展を遂げるかということにあった。当初、リーと彼の「盟友」達は、その理想主義からマレー半島において、あらゆる人種が平等な権利を持つべきことを主張していた。しかし、この理想主義を追求したことでマレー系政治指導者と対立し敗北する。この敗北以降、リーとその「盟友」達は、シンガポールを独立した国家として存続させるためのあらゆる現実的な方策を追求するようになる。こうした状況のなかで、リーは「徹底したプラグマティズム」（超現実主義）の政治哲学に目覚めていく。このリーの政治哲学は、現在の政権党である人民行動党にも引き継がれ、シンガポールを支える社会的な価値観となっている。

リーと彼の「盟友」達が国家存続の重要な資源として重視したのは、優秀な人材の育成であり、その優秀な人材によって運営されるエリート主義的な官僚機構の確立であった。マイクロ・ステートと言っても過言ではない狭小な国家であるシンガポールでは、国民生活を支える食糧・水資源にも乏しく、これを補えるのは優秀な人材とその知恵以外にはなかった。リーとその「盟友」達は、優秀な人材を育て、シンガポールを独立した国家として存立させ得る知恵を常識にとらわれず実行に移していった。リーのカリスマ性に支えられた権威主義体制と「超現実主義的」政策、これを実施するエリート官僚の存在がシンガポールの驚異的な経済成長を支えてきた。しかし、リー一族の特権階級化と華人系住民とその他の住民との経済格差の拡大、徹底したメリトクラシ

一から生じる社会・経済的格差が常態化することで、華人を中心とした閉じられた権力構造を生み出し、政治腐敗の温床になっている点を指摘している。

第3章では、まず政治的腐敗とは一体何なのか、という一般的な疑問を出発点に、これまで政治的腐敗がどのように定義されてきたのか、その歴史の変遷をたどっている。特に、それぞれの国の近代化の過程あり方が、それぞれの国における政治的腐敗のあり方に大きな影響を与えていることを指摘している。その上で、第1章と第2章で考察したマレーシアとシンガポールの事例を参考に、一般には政治的腐敗として考えられる現象が、その国や地域の経済発展を阻害する場合としない場合があることを指摘している。その違いを生み出す要因を、政治的腐敗と経済発展の相関性の観点から考察している。その結果、政治的腐敗と経済発展の間には政治文化や権力の制度の過程といった要因が媒介変数として機能していることに言及している。

結論では、これまでの章の考察を総括し、経済学においては軽視されることが多かった各国の政治文化や権力の制度の過程といった要因が政治的腐敗と経済発展の関係を考察する上で重要な独立変数であり、この二つが経済発展を促進する合理的な構造を保持しているか否か、が極めて重要な要素であることを指摘している。また同時に、この関係性は状況によって常に変化を遂げるものであり、一般的には政治的腐敗と見られる現象があっても経済発展を阻害しない状況があっても、これが長期的に継続すれば、次第に経済発展のダイナミズムを阻害したり、社会・経済・政治的な不平等を社会にもたらしたりするようになる。中川氏は、マレーシアとシンガポールの事例をもとに、政治的腐敗が存在しても経済発展を阻害しない状況から、政治的腐敗が経済発展を阻害するようになるまでの3つのフェーズを明らかにしている。

5 論文の特質

本学位請求論文は、これまで必ずしも十分に解明されてこなかった問題、つまり政治腐敗のために経済発展を遂げられない国が多数存在する一方で、政治腐敗が存在してもそれが国や地域の経済発展を阻害しない場合があるというパラドックスに正面から挑戦し、一定の解答を導き出した点で高く評価できる。つまり、極めて強い政治的リーダーシップの下で、経済発展を促す一貫した政策が実施される政治権力の制度化が行えた国や地域においては、さまざまな政治腐敗と見える現象が存在したとしても経済は発展するという点を指摘したところに、中川氏の論文のユニークさを認めることができる。

6 論文の評価

これまで、自由主義的デモクラシーの価値を重視する国々では、民主的な政治制度の存在こそが経済発展の当然の前提として考えられてきたふしがあるが、実は権威主義的体制の下でも経済発展は可能であるという事実を客観的に示した論文である。また、現代の大きな変動の中で登場しているヨーロッパ諸国のポピュリズムや中国に代表される強権的な権威主義体制という政治モデルに対して、自由主義的デモクラシーという政治的モデルがどれだけのレジリエンスを持ちうるのか、という問題も浮かび上がった点で極めて興味深い論文となっている。まだまだ、荒削りな部分もあるが、審査員一同は、中川氏の今後の研究に大きな期待が持てるという点で一致した。口頭試問における説明も極めて組織立っており、審査委員の質問に対しても説得力のある回答を行った。本学位請求論文は博士学位論文として認めるに足る内容を備えている。

7 論文の判定

本学位請求論文は、政治経済学研究科において必要な研究指導を受けたうえ提出されたものであり、本学学位規程の手続きに従い、審査委員全員による所定の審査及び最終試験に合格したので、博士（政治学）の学位を授与するに値するものと判定する。

以 上

主査氏名（自署）_____